

日中の青少年相互理解のため実施されている第11回「中国人の日本語作文コンクール」(主催:日本橋報社・日中交流研究所、後援:一般社団法人アジア調査会など)が行われ、最優秀賞(日本大使賞)1人、一等賞5人、二等賞15人、三等賞50人が決まり昨年12月12日、北京の日本大使館で表彰式が行われました。今回のテーマは①「日中青年交流について——戦後70年の青年交流を考える」②「なんでそうなるの?」——中国の若者は日本のここが理解できない③わたしの先生はすごい——第1回日本語教師、総選挙 in 中国——の3つでした。コンクールには中国各地の180校から史上最多の4749本の応募がありました。11回目を迎えたコンクールのこれまでの総応募は27981人、三等賞以上の受賞者630人、佳作552

人にのほります。主な受賞者は▽日本大使賞:張晨雨さん(山東政法学院)「なんでそうなるの? 好きやねん、大阪」▽一等賞:雷雲恵さん(東北大学秦皇島分校)「日中青年交流について 和歌で結びついた絆」▽同:莫泊因さん(華南理工大學)「日中青年交流について 中日文化のつながりを構築しよう」▽同:張戈裕さん(嶺南師範學院)「私の先生はすごい」▽同:翁曉曉さん(江西農業大學南昌商學院)▽同:陳靜璐さん(常州大學)「日中青年交流について 私 は折り鶴になりたい——平和な世界のために——」で、最優秀賞を獲得した張晨雨さんは副賞として日本へ1週間招待されます。上位入賞71本の作文を掲載した「なんでそうなるの——中国の若者は日本のここが理解できない」(日本橋報社)も出版され好評です。アジア時報は今月号と4月号の2回に分けて最優秀賞と一等賞の計6作品を掲載します。(編集部)

最優秀作発表

中国人の日本語作文コンクール

日本橋報社など主催
アジア調査会後援

アジア時報

2016.3



The Asian Affairs Research Council

特別寄稿	韓国社会の核武装論をどう見るか	小針 進
特集	米大統領選を追う 予想以上の健闘を見せる非主流派候補	渡辺 靖
アジア調査会講演会	日本経済と国政の動向	茂木 敏充



最優秀賞（日本大使賞）
 テーマ「なんでそうなるの？」
好きやねん、大阪
 山東政法学院 張晨雨 ちようしんう

中国では北京人と上海人のお国自慢合戦が有名である。自慢するだけでなく相手を容赦なくのしる。有名作家秋雨は本の中で上海人のことを「傲慢で、自分勝手で、政治感覚がなく、浅はかだ」と書いている。上海嫌いな人は大喜びだ。

私自身は、北京と上海の自慢合戦にあまり興味がない。でも、日本語を勉強し始めて、日本にも北京と上海のような、大阪と東京の「砲煙なし戦争」があることを知った。大阪人は東京人に「ケチで俗っぽい」とばかにして笑われて、大阪人は「東京人は孤高を標榜するだけ」と反論しているが、やはり、分が悪い。

私の叔母は五年前から仕事で大阪に住んでいる。叔母は中国に帰ってくるたびに、よく私に大阪の話をしてくれる。大阪人は日本人だけ、まるで中国人みたいだよ。

叔母が最初に大阪に行ったとき、道に迷ってしまい、見知らぬおばあさんに道をたずねた。すると、そのおばあさ

ようにしたそう。日本標準ではなくて、世界基準なのだ。こんなところにも大阪の誇りを感じる。

叔母は時々、大阪人が人に道を教える時のマネをしてくれる。「そこをビュッと行って、エレベーターに乗ってドーンと降りるんや」。

私は「ビュッ」「ドーン」と言われてもよくわからないのだが、叔母はこれが大阪流の親切さと説明してくれた。私は、もともと、お笑いやジョークがとても好きだ。

寮の中でネットを開いては大阪人を取り上げた番組にひとりでこっそり笑っている。

テレビのスタッフが街頭でインタビュをするのに、マイクの代わりにタワシを差し出した。東京の人が困った様子で「これ、タワシじゃないですか」と答えた。嫌な顔をする東京人と逆に、大阪の人は、すました顔でインタビュに答えている。連れの人も加わって、見事なジョークのコンビプレーを見せてくれる。

日本語を勉強し始めてもうすぐ、三年になる。大好きな大阪の漫才を見ても、実は、まだ半分しか味が分からない。でも、大阪人の表現の仕方は、言葉がまだ私の私にもとても面白い。なぜ、こんな素敵な大阪が東京人に嫌われるのか私にはわからない。

大学を卒業したら大阪に行く、というのが今の私の夢だ。もっと、もっと、日本語を勉強して、いつか私はきつとこ

んは目的の地までついてきてくれたそう。その時、叔母は日本語を少ししか話せなかったが、「日本人がこんなに親切で優しい人たちだとは思わなかった」と話してくれた。

日本語を勉強し始めた時、「大阪弁はイントネーションが標準語と反対のものが多くので気をつけるように」と先生に言われたことがある。「雨」と「飴」、「箸」と「橋」などもともと覚えるのが難しいのにイントネーションをまちがえてよく注意される。

大阪のお笑い番組が大好きだ。大阪弁の漫才は私の故郷の「小品」にとっても雰囲気似ている。「ほけ」と「つっこみ」は大阪弁でないと面白さが伝わらない。少しづつ、日本語が分かるようになって、ますます、大阪に興味が出てくる。

小さな子供からおじいさんまで、大阪人はみんな大阪弁でしゃべる。関西学院大学の教授が調べたデータによると、「地元言葉が好き」「どちらかと言えば好き」と答えた人は東京では58%。一方、大阪では92・1%。大阪弁を愛する大阪人は妙なイントネーションの大阪弁を使う人に厳しい。大阪への愛情と誇りに溢れた人たちののだ。

資料で見つけた大阪の特徴に、日本ではどこでもエスカレーターは左側に並んで乗るのに、大阪だけは右側に並ぶというのがある。同じ日本なのに「どうして？」と思ったから、万博のときイギリスやフランスに倣って、右側に並ぶ

の目で本物の大阪を見に行く。大阪人と大阪弁で冗談を言えるような目を夢見ている。

(指導教官：藤田炎二)



一等賞
 テーマ「日中青年交流について」
和歌で結びついた絆
 東北大学秦皇島分校 雷雲恵 らいうんけい

「瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ」

葉書の真ん中に美しく書かれてある歌。彼女からの葉書だ。「今は別れていても再び会おう」という情熱的な恋の歌だ。ここ最近、小雨がしとしと降り続けている。冬の寒さに耐えながら静まりかえっていた植物が、知らず知らずのうちに若葉を生やし、この町に活気を与えている。彼女と別れて、もう一年が経つが、あの日々はいつまでも忘れられない。

去年の冬休みに北京の大学合同日本語研修プログラムに参加した。ここには日本人留学生も来ていた。クラスに日本人の友達はいたが、親友と呼べるほどにはなれなかった。心の奥底にある不自然な感覚が、もっと親しくなりたいと

願う気持ちとぶつかっていた。
しかし、たまたま和歌が好きで彼女と出会う機会があった。

「君がため 春の野に出て 若菜摘む わが衣手に 雪は降りつつ」

この和歌は彼女が教えてくれた最初の歌だ。

「平安時代の光孝天皇が、大切な人を思いながら春の若菜を摘んだときの歌なんだよ。」

「そうなんだ。でも、天皇ともあろう人が野草を摘むなんて、なんか不思議じゃない？」

「そうかもね。でも、どんなに偉い人でも好きな人への気持ちは同じなんじゃないかな。特に、新春の若菜は邪気を祓ってくれると考えられてたから、大切な人への気持ちは伝わってくるよね。」

「うん、確かに伝わる。」

「それに、このころの天皇は、みんなが順風満帆ではなかったから、不遇な時代を忘れないための質素な生活をしてたという背景もあるみたいよ。」

たった31文字だけなのに、彼女の説明のおかげで、まるで目の前にあるシーンのように感じられた。言葉の優雅な美しさと野原に降る白雪の趣は、歌人の純粹で優しい心と重なり、ひしひしと心に響いてきた。雨が上がり空が晴れ、夕日の光でだんだんと私たちの影が長く伸びていった。

彼女と親しくなっているという実感を自然に感じて受け入れられていることに気づいた。心が揺さぶられるような感動を覚えた。毎日、彼女と和歌の世界を漫遊する時間を楽しんでいた。

プログラムが終わり、彼女が駅まで送ってくれた。駅までの途中ずっと、私の手をしっかりと握りしめてくれた。駅の前に着き、「学校に戻っても、和歌のことも、私のことも忘れないでね！」と彼女が言った。こぼれそうな涙が光の中でキラキラしていた。手から心に伝わる温かさがお互いの心を繋いでいた。国も文化も違う二人が和歌の橋を渡り、気心の知れた友人になった。不思議な導きを感じた。

歴史や社会の影響を受け、私たち中国人は日本人と接触するときに、不自然な感覚を抱かずにはいられない。中日両国はもう永遠に友人に戻れないと思う人も多いだろう。しかし、それは違うと彼女が私に教えてくれた。最初の不自然さも、あるきっかけによって自然に薄れて行く。彼女と私のきっかけは和歌だった。純粹に和歌が好きで二人の心は国境を越えて、重なり合い、わかり合うことができた。

そんなことを思い出しているとき、葉書の和歌がまた目に留まった。この歌は私たちが一番好きな和歌だった。

「ただの恋の歌じゃなくて何かを伝えようとしている。」
そんな直感が私にひらめいた。彼女が冬休みに教えてく

れた見立てをふと思いついたからだ。「今は中日関係が悪くて戦争という岩に割かれた状態だが、それでも別れた水が再び出会うように、私たちも両国の情勢に関係なくまた会いたい」という強い気持ちが込められている。何故かはわからないが、そう確信できた。冬休みに二人の絆が深まったように、もつと多くの中日の青年たちも交流することで絆を深めていける。友好の流れが合わさる日は必ず来る。

「思いを持ち続けていれば、また会える」と返事に書いた。離れていても心は重なる。また会える、そう確信できるから。

(指導教官・肖瀟)



一等賞
テーマ…日中青年交流について
中日文化のつながりを構築しよう
華南理工大 莫泊因

「キャップはバチンと音がするまでしっかり閉めて下さい。」

これは私が初めて覚えた日本語だ。「こんにちば」ではなく、三菱の水性ペンのキャップに書いてあったその文だ。日本語が全く分からなかった私には、漢字と仮名を混ぜた

その文に興味にそそられ、その意味を調べたり、何度も書いてみたりした。それがいわば日本語との出会いが始まったころだ。今になって思えば、その出会いは日中の緊密な経済交流のおかげだ。

愛用者が多かったため、パイロットや三菱鉛筆の文房具が常に中国の書店の一角を閉めている。文房具のみならず、ニュース放送のための撮影機材、中国全土で走っている日本車、人気を博したラーメンと寿司……このように、日本製品が中国人の日常生活に浸透し、欠かせない存在になっている。

しかし、もし中日戦争が再び勃発し、両国の関係が氷点まで冷え込むと、日本製品の文房具まで売り場から姿を消し、日本料理店も閉店することが余儀なくされるのだろうか。日本と関わっているものはすべて中国人の日常生活から排除され、経済のつながりが切られてしまうことも予想される。

だが、ただ一つ、切っても切れないつながりが残っている。それは文化だ。

前日、日本への郵便の送り状を郵便局員に見せた時、「日本の地名には漢字が多いな。日本人は中国のいいところをパクっているんだね」と言われた。確かに、中国から伝来した日本語の骨格を務めている漢字が欠落すると、日本語は成り立たないのだろう。また、漢字だけではなく、仮名

も、中国の草書から派生したものだ。日本語の源流が中国語にまで遡ることができると言えよう。

もし、日本が中国のいいところをパクっているといったら、中国も同じく日本のいいところをパクっていることになる。現代中国語の中に、日本から逆輸入された言葉が多く見られる。よく知られている「物理」や「哲学」のほか、「経済」や「時間」なども中国語で使用頻度が高い言葉だが、実はそれは和製漢語だったという。

中国語の不可欠な一部となっているこれらの和製漢語は、パクリより中日両国の途絶えることのない文化交流の証であると言えよう。たとえ戦争を引き起こされたとしても、日本が漢字を廃棄し、中国が「時間」や「文明」といった和製漢語を辞書から抹消することはしないだろう。中日両国の文化のつながりは、想像以上に強靱なものだ。

この数十年、アニメ、ゲームやドラマは次第に漢字や漢語の役を受け継ぎ、新たな文化のつながりとなっている。

ウルトラマンに熱狂していた小学時代の私にとって、日本はしばしば怪物や宇宙人に襲われていた国であり、それを恐れずに戦う科学特捜隊の勇士の故郷でもある。中学に入ってから、私は「太閤立志伝」というゲームを通じて、織田信長や豊臣秀吉を知り、日本が風雲児の輩出する国だと思ふようになった。このように、日本への理解が徐々に深まってきて、真の日本像が浮き彫りになってきたのだ。

しかし、それはまだ不十分だ。

アマゾンで中国文学のベストセラーを調べてみたら、出てきたのが『西遊記』や『三国志』のような古臭いものばかりで、現代中国文学の傑作の邦訳がいつこう見つからない。また、日本で中国文学の現状を描いた作品は稀であり、中国への理解を深めるのは難航していると言つてよい。中国マネーが日本に進出しているのに対し、中国の文化は日本まで伝わっていない。もし「中国についてどう思いますか」という質問を日本の方々に投げると、帰ってくる答えは、おそらく五千年余りの歴史を持つ絢爛たる中華文明ではなく、意味不明な言葉で声高に話したり、ゴミを散らしたりする中国人の姿だろう。文化交流が進まない限り、中国に対する誤解は深刻化の一途をたどるに違いない。

文化交流というのは、一方通行ではない。中国への理解を深めてもらうためには、お互いの文化の発信力強化が必要なのだ。一青年としての私は、そのために身に付けた日本語を生かし、微力ながらも中日両国の誤解を解く事業に捧げていきたいと思つている。

(指導教官：金華)



中国人の
日本語作文
コンクール
★★★
[第11回] 受賞作品集

日中交流研究所 所長
段躍中 編

なんで
そうなるの？
中国の若者は日本の「コ」が理解できない

一編一編の
作文が
未来への
架け橋。

張晨雨 (1994・18歳)
第11回「中国人の日本語作文コンクール」
最優秀賞 (日本大使賞) 受賞

20th
おかげさまで20周年
since 1994